

# 源氏物語

藤袴

紫式部

青空文庫



むらさきのふぢばかまをば見よといふ

二人泣きたきここち覚えて (晶子)

尚ないしのかみ侍な

になつて御所へお勤めするようにと、源氏はもとより実父の内大臣のほうから  
も勧めてくることで玉たまかざら鬘はんもんは煩悶はんもんをしていた。それがいいことなのであろうか、養父

のはずである源氏さえも絶対の信頼はできぬ男性の好色癖をややもすれば見せて自分に臨  
むのであるから、お仕える君との間に、こちらは受動的にもせよ情人関係ができた時は、

中ちゆうぐう宮みやも女御にょぎも不快ふかいに思われるに違いない、そして自分は両家のどちらにも薄弱な根底

しかない娘である。中宮や女御における後援は期して得られるものでない上に、自分の幸  
運げな外見をうらやんで何か悪口をする機会がないかとうかがっている人を多く持つてい  
てはその時の苦しさが想像されると、若いといつてももう少女でない玉鬘は思つて苦しん  
でいるのである。そうかといつて今のままで境遇を変えずにいたことはいやなことではな  
いが、源氏の恋から離れて、世間の臆おくそく測そくしたことが真実でなかったと人に知らせる機会  
というものの得られないのは苦しい。実父も源氏の感情をはばかり、親として乗り出し

て世話をしてくれるようなことはないと見なければならぬ。曖昧な立場にいて自身は苦勞をし、人からは嫉妬しつとをされなければならぬ自分であるらしいと玉鬘は歎なげかれるのであつた。実父に引き合わせてからはもう源氏は道德的にはばからねばならぬことから解放されたように、戯れかかることの多くなつたことも玉鬘を憂鬱ゆううつにした。自分の心持ちをにおわしてだけでも言うことのできる母というものを玉鬘は持つていながつた。東の夫人にせよ、南の夫人にせよ、娘らしく、また母らしくはして交わつてくれるが、どうしてそんな貴婦人に内密の相談などが持ちかけられようと思つと、だれよりも哀れなのは自分の身の上であるような気がして、夕方の空の身にしむ色を、縁に近い座敷からながめて物思ものしいをしているのであつたが、その様子はきわめて美しかつた。淡鈍色うすにびの喪服を玉鬘は祖母の宮のために着ていた。そのために顔がいつそうはなやかに引き立つて見えるのを、女房たちは楽しんでながめている所へ、源宰相の中將が、これも鈍色にびの今少し濃い目な直衣のうしを着て、冠を巻まき纓えいにしてるのが平生よりも艶えんに思われる姿で訪たずねて来た。最初のころから好意を表してくれる人であつたから、玉鬘のほうでも親しく取り扱つた習慣から、今になつても兄弟ではないというような態度をとることはよろしくないと思つて、御簾みすに几帳きちやうを添えただけの隔へりで、話は取り次ぎなしでした。今日は源氏の用で来たのである。

宮中からあつた仰せを源氏は子息によつて伝えさせたのである。おおようではあるが要領を得た返辭をする様子に、中將は貴女きじよと話し合う快感が覚えられた。野分のわきの朝にのぞいた顔の美しさの忘られないのを、その人は姉ではないかと恋しくなる心を責めていた中將であつたが、そうした障りさわの除かれた今は恋人としてこの人を中將は考えていた。尚侍の職をお勤めさせになるだけで帝は御満足をあそばすまい、この世で第一の美貌びぼうをお持ちになる帝との間に恋愛關係は必ずできてくることであろうと思つと、中將は胸を何かでおさえつけられる気もするのであつたが自制していた。

「人に聞かせぬようにと父が申されましたことを申し上げようと思ひますが、よろしいのでしようか」

と意味ありげに言つてゐるのを聞いて、女房たちは少し離れた場所を捜して、几帳の後ろのほうなどへ皆行つてしまつた。中將は源氏の言つたのでもない言葉を、真実らしくいろいろと伝えていた。帝が尚侍にお召しになる御真意は別にあるらしいから、きれいに身を護まもろうとすれば始終その心得がなくてはならないというような話である。返辭のできることでもなくて、玉たま鬢かすらがただ吐息といきをついてゐるのが美しく感ぜられた時に、中將の心にはおさえ切れないものが湧わき上がつてきた。

「私たちの喪服はこの月で脱ぬぐはずですが、暦で調べますと月末はいい日ではありませんから延びることになりますね。十三日に加茂の河原へ除じよふく服の御祓みそぎにあなたがおいでになるように父は決めていられるようです。私もごいつしよに参ろうと思つています」

「ごいつしよでは目だつことになるでしょう。だれにもあまり知られないようにして行くほうがいいかと思ひます」

と玉鬘は言つていた。内大臣の娘として大宮の喪に服したことなどは世間へ知らせぬようにせねばならぬと考えるところにこの人の聡そうめい明と源氏への思いやりが現われていた。

「隠ひそしたくお思ひになることが私には恨めしい氣もいたしますよ。悲しい祖母のかたみのような喪服ですから、私は脱いでしまうのも惜しく思われるのです。それにしましてもやはりあなたと私とは一人の方を祖母に持つているのですから不思議な氣がいたしますね。喪服をお着になることがありませんでしたら、真実のことを私は知らずじまいになったのかもかもしれません」

「私などにはましてよくわかりませんが、とにかく喪服を着ております氣持ちは身にしむものですね」

こう言う玉鬘の平生よりもしんみりとした調子が中将にうれしかった。この時と思つ

たのか、手に持つていた蘭ふじばかまのきれいな花を御簾みすの下から中へ入れて、

「この花も今の私たちにふさわしい花ですから」

と言つて、玉鬘たまむすが受け取るまで放さずにいたので、やむをえず手を出して取ろうとする袖そでを中将は引いた。

「おなじ野の露にやつるる 藤ふぢばかま 袴 哀あはれはかけよかごとばかりも

道のはてなる（東路あづまぢの道のはてなる常陸帯ひたちおびのかごとばかりも逢はんとぞ思ふ）

こんなことが言いかけられたのであった。玉鬘にとつては思いがけぬことに当惑を感じながらも、気づかないふうをして、少しづつ身を後ろへ引いて行った。

「たづぬるに遥はるけき野の辺の露ならばうす紫やかごとならまし

従姉いとこということは事実だからいいでしょう。そのほかのことは何も」

と言つと、中将は少し笑つて、

「その事実のほかに考えてくださらなければならぬこともおわかりになるはずですがね。常識ではもつたいたくないことだと思つてはいるのですが、この感情はおさえられるものでないのですからお察しく下さい。こんなことを告白してはかえつてお憎みを受けることになろうと思つて今までは黙つていたのですが、ただ哀れだと思つてただくだけのことです満足したい心にもなつてはいます。頭中將の近ごろの様子をご存じですか、あのころは明らかに第三者だと思つていた私が、こんな恋の苦しみを味わうようになるなどということに冷淡にした時の報いです。今ではあの人冷静になつてしかもつながる縁のあることに満足してはいますから、うらやましくなりません。かわいそうだとだけでも私をお心にとめておいてください」

まだいろいろに言つたのであるが、中將のために筆者は遠慮しておく。玉鬘たまかざらに気味悪く思うふうの見えるのを知つて、

「私を信じてくださらないのですね。ばかな真似まねなどをする人間でないことはおわかりになつてはいるはずですが」

こう中將は言つた。この機会にもう少し告げたい感情もあるのであつたが、  
「少し気分が悪くなつてきましたから」



と言つて、玉鬘が向こうへはいつてしまつたのを見て、深く中將は歎息しながら去つた。

よけいな告白をしたと中將は後悔をしたのであつたが、この人以上に身に沁んで恋しく思われた紫の女王と、せめてこれほどの接触が許されてほのかな声でも聞きうる機会をどんな時にとらえることができるであろうと、その困難さを思つて心を苦しめながら中將は南の町へ来た。源氏はすぐ出て来たので、中將は聞いて来た返事をした。

「御所へ上がるのを、やつとしぶしぶ承諾した形なのだから困る。兵部卿の宮などが求婚者で、深刻な情熱の盛られたお手紙が送られていて、そのほうへ心が惹かれるのではなからうかと思うと気の毒な気にもなる。しかし大原野の行幸の時にお上を拝見して、お美しいと思つた様子だったのだからね。若い女は一目でもお顔を拝見すれば宮仕えのできる者は皆出ないではいられまいと思つて、最初に私の計らつたことなのだが」

などと源氏は言う。

「それにしましてもあの方はどんなふうになられるのがいちばん適したことでしょう。御所には中宮が特殊な尊貴な存在でいらつしやいますし、また弘徽殿の女御という寵姫もおありになるのですから、どんなにお気に入りに入りますしてもそのお二方並みにはなれな

いことでしよう。兵部卿の宮は熱烈に御結婚を望んでおいでになるのですから、表面は後宮の人ではありませんでも、ないしのかみ尚侍などにお出しになることによって、これまでの親密な御交情がそこなわれはしないかと私は思いますが」

中將は老成な口調で意見を述べた。

「むずかしいことだね。私だけの意志でどう決めることもできない人のことではないか。それなのに右大將なども私を恨みの標的まにしてしているそうだ。一人の求婚者に同情して与えてしまえばほかの人は皆失恋することになるのだから、うかと縁談が決められないのだよ。あの人を生んだ母親が哀れな遺言をしておいたのでね、郊外であの人が心細く暮らしているということを知っていて、内大臣も子と認めようとするふうは見えないと悲観しているようだったから、最初私の子として引き取ることにしたのだよ。私が大事がるのでやつと大臣も価値を認めてきたのだ」

源氏は真実らしくこう言っていた。

「人物は宮の夫人であることに最も適していると思う。近代的で、えん艶な容姿を持っていて、しかもそうめい聡明で、過失などはしそうでない女性だから、いい宮の夫人だと思う。そしてまた尚侍の適任者でもあるのだよ。びぼう美貌で、きじょ貴女らしい貴女で、職責も十分に果たしうるよ

うな人物というお上の御註文どおりなのはあの人だと思う」

とも言った。中将は源氏自身の胸中の秘事も探りたくなつた。

「今日まで実父に隠してお手もとへお置きになつたことで、いろいろな忬そんたく度を世間はしております。内大臣もそんな意味を含んだことを、右大将からあちらへの申し込みに答えて言つたそうです」

と中将が言うと、源氏は笑いながら、

「それは思いやりのありすぎる迷惑な話だね。宮仕えだって何だつて内大臣の意志を尊重して、私はできる世話だけをする気なのだがね。女の三従の道は親に従うのがまず第一なのだからね。その美風を破るようなことはとんでもないことだ」

と言つた。

「こちらには以前からりっぱな夫人がたがおいでになつて、新しくその数へお入れになることができないため、世間体だけを官職におつけになることにして、やはりいつまでも愛人でお置きになることのできるようなお計らいは、賢明な処置だといって、大臣が喜ばれたということ、確かな人から私は聞きました」

中将が真正面からこう言うのを聞いて、源氏は内大臣としてはそうも想像するであろう

と氣の毒に思つた。

「曲がつた解釈をされているものだね。それが賢明な人の觀察というものかもしれない。もうすぐに事実が万事を明らかにするだろう。しかし、どうなるにしても余りにひどい想像だ」

と源氏は笑つていた。あざやかな弁解をしたつもりであろうが、まだ疑いは十分に残してよいことであると中将は思つていた。源氏も心の中で、こう人の噂する筋書きどおりのあやまつた道は踏むまいとみずから警めた。このきれいな気持ちをお大臣にも徹底的に知らせたいと源氏は思つたが、玉鬘たまかずらを官職につけておいて情人關係を永久に失うまいとすることなどを、どうして大臣に觀測されたのであろうと薄氣味悪くさえなつた。

玉鬘は除服じよふくしたが、翌月の九月は女の宮中へはいることに忌む月でもあつたから、十月になつてから出仕することに源氏が決めたのを、お聞きになつて帝みかどは待ち遠しく思召おぼしめした。求婚者は皆尚侍に決定したことを聞いて残念がった。それまでに縁組みを決めて、御所へはいるのを阻止したいと皆あせつて、仲介者になつてゐる女房たちを責めるのであるが、尚侍の出仕を阻止するようなことは、吉野よしのの滝をふさぎ止めるよりもなお不可能なことであるとそれらの女たちは言つていた。源中将はしないでよい告白をしたことで感情

を害しなかつたかと不安で、この苦しみを紛らわすために一所懸命に尚侍の出仕についての用などに奔走して好意を見せることにつとめていた。もうあれ以来軽率に感情を告げたりすることもなく慎んでいたのである。兄弟である内大臣の子息たちはまだ遠慮が多くて出入りをようしないのである。御所で尚侍の後援をするためにはもつと親しくなっておかないでは都合が悪いのにと、その人たちは不安に思っていた。頭とうの中將は恋やっこの奴こになつて幾通となく手紙を送つてきたようなこともなくなつたのを正直だといつて女房たちはおかしかつていたのであるが、父の大臣の使いになつて訪たずねて来た。まだ公然に親であり娘であるという往来ゆきぎははばかつて、そつと手紙を送つて、そつと返事を玉たま鬢かざらが出すほどにしかしてないのであつたから、こうした月明の晩に隠れて頭の中將も訪ねて来たのである。以前はだれからも訪問者として取り扱おうとされなかつた中將が、今夜は南の縁側に座を設けて招ぜられた。玉鬢は自身で出て話をするにはまだ恥ずかしくてできずに、返辞だけは宰相の君を取り次ぎにしてした。

「私が使いに選ばれて来ましたのは、お取り次ぎなしにお話を申すようにという父の考えだつたかと思いますが、こんなふうな遠々しいお扱いでは、それを申し上げられない気がいたします。私はつまらぬ者ですが、あなたとは離しようもなくつながつた縁のあります

ことで、自信に似たものができております」

と言つて、中将はもう一段親しくしたい様子を見せた。

「ごもつともでございます。長い間失礼しておりましたお詫<sup>わ</sup>びも直接申し上げたいのでございませぬが、身体<sup>からだ</sup>が何ということなしに悪うございました、起き上がりますのも大儀でございませぬものですから、こうさせていたでいてるのでございます。ただ今のようなお恨みを承りますのは、かえつて他人らしいことだと存じます」

まじめな挨拶<sup>あいさつ</sup>を玉鬘はした。

「御気分が悪くてお寝<sup>やす</sup>みになつていらつしやる所の几帳<sup>きちょう</sup>の前へ通していただけませんか。しかし、よろしゅうございます、しいていゝんなお願いをするのも失礼ですから」

と言つて頭の中将は大臣の言葉を静かに伝えるのであつた。身の取りなしも様子も源中将に匹敵するもので、感じのいい人である。

「御所へおいでになることでは、くわしいお報<sup>し</sup>らせもまだいただいでいませぬが、あなたからその際にはこうしてほしい、何が入り用であるとかいうことを言つてくださつたら、そのとおりにしたいと思つています。世間の目にたつことが遠慮<sup>たす</sup>されて訪<sup>たず</sup>ねて行くこともできず、思うことを直接お話しできないのを遺憾に思つています」

というのが父の大臣から玉鬘へ伝えさせた言葉であつた。

「私が過去に申し上げたことについては、それほど訂正しないでもいいと思います。どちらにもせよ愛していただければいいのです。そう思いますとまた恨めしい気にもなります。今夜の御待遇などからそう思うのです。北側のお部屋へやへお入れになって、いい女房がたは失礼だとお思になるでしょうが、下仕え級の方とでも話して行くようなことがしたいのです。兄弟をこんなふうにお扱いになるようなことは、これも不思議なことといわなければなりませんよ」

批難するふうに言っているのもおかしくて、宰相の君に玉鬘は言わせた。

「人聞きが遠慮いたされまして、あまりにわかな変わり方は見せられないように思うものですから、お話し申し上げたい長い年月のことも、聞いていただけませんことで、私もお言葉のように残念でならないのでございます」

ときまじめな挨拶あいさつをされ、頭の中將はきまりが悪くなつて、この上のことは言わないことにした。

「妹背山深き道をば尋ねずてをだえの橋にふみまどひける

そうでしたよ」

と真底から感じているふうで中将は言った。

「まどひける道をば知らず妹背山たどどしくぞたれもふみ見し

と申されます」

と女主人の歌を伝えてからまた宰相は言う、

「どのことをお言いになりますことかそのころはおわかりにならなかつたようでございます。ただあまり御おとなしくて御遠慮ばかりあそばすものですから、どなた様へもお返事をお出しになることがなかつたのでございます。これからは決してそうでもございませんでしょう」

もつともなことでもあつたから、

「ではまあよろしいことにしまして、ここで長居をしておりますもつまりません。誠意を認めていただくことに骨を折りましょう。これからは毎日精勤することにして」



と言つて中将は歸つて行くのであつた。月が明るく中天に上つていて、えん艶な深夜に上品な風采ふうさいの若い殿上人の歩いて行くことははなやかな見ものであつた。源中将ほどには美しくないが、これはこれでまたよく思われるのは、どうしてこうまでだれもすぐれた人ぞろいなのであろうと、若い女房たちは例のように、より誇張した言葉でほめたてていた。

大将はこの中将のいる右近衛うこんえのほうの長官であつたから、始終この人を選んで玉鬘たまかざらとの縁組みについて熟談していた。内大臣へも希望を取り次いでもらつていたのである。人物もりつぱであつたし、将来の大臣として活躍する素地のある人であつたから、娘のために悪い配偶者ではないと大臣は認めていたが、源氏が尚な侍のかみをばどうしようとするかには抗議の持ち出しようもなく、またそうすることには深い理由もあることであらうと思つていたから、すべて源氏に一任していると返辞をさせていた。この大将は東宮の母君である女御にょごとは兄弟であつた。源氏と内大臣に續いての大きい勢力があつた。年は三十二である。夫人は紫の女王にょおうの姉君であつた。式部卿しきぶきょうの宮の長女である。年が三つか四つ上であることはたいして並みはずれな夫婦ではないが、どうした理由でかその夫人をお婆ばあさ様と呼んで、大将は愛していなかった。どうかして別れたい、別に結婚がしたいと願つていた。そうした夫人の關係があるために、源氏は大将と玉鬘との縁談には賛成ができな

いでいたのである。大将の家庭のためにもそう思ったことであり、玉鬘のためにも煩雑な関係を避けさせたかったのである。大将は好色な人ではないが、夢中になって玉鬘を得ようとしていた。内大臣も断然不賛成だということでもないという情報を大将は得ていた。玉鬘自身は宮仕えに気が進んでいないということもまた身边にいる者からかくわしく伝えられて大将は聞いていた。

「ではただ源氏の大臣だけが家庭の人になるのに反対していられるのだというわけではないか。実父がいいと思われる事どおりになすつたらいいじゃないか」

と大将は仲介者の女房の弁を責めていた。

九月になった。初霜が庭をほの白くした艶えんな朝に、また例のように女房たちが諸方から依頼された手紙を、恥じるようにしながら玉鬘たまかざらの居間へ持って来たのを、自分で読む

ことはせずに、女房があけて読むのをだけ姫君は聞いていた。右大将のは、恋する人の頼みにします八月もどうやら過ぎてしまいそうな空をながめて私は煩悶はんもんしております。

数ならばいとひもせまし長月に命をかくるほどぞはかなき

十月に玉鬘が御所へ出ることを知っている書き方である。兵部卿ひょうぶきょうの宮は、不幸な運命を持つ、無力な私は今さら何を申し上げることもないのですが、

朝日さす光を見ても玉たま笹ざさの葉は分わけの霜しもは消けたずもあらなん

私の恋する心を認めていてくださいましたら、せめてそれだけを慰めになりたいと思っています。

というのである。手紙の付けられてあつたのは縮かんだようになった下折れ笹ささに霜しもの積しきもつたのであつて、来た使いの形もこの笹ささにふさわしい姿であつた。式部卿しきぶきょうの宮みやの左さひよ兵衛べゑ督のかみは南の夫人の弟である。六条院へは始終来ている人であつたから、玉鬘の宮中入りのこともよく知つていて、相当に煩悶ぼんもんをしているのが文意に現あらわれていた。

忘れなんと思ふも物の悲しきをいかさまにしていかさまにせん

選んだ紙の色、書きよう、焚きしめた薫香の匂いもそれぞれ特色があつて、美しい感じ、はつきりとした感じ、奥ゆかしい感じをそれらの手紙から受け取ることができた。玉鬢が御所へ出るようになればこうしたことがなくなることを言つて、女房たちは惜しがつていた。宮への御返事だけを、どういう気持ちになつていたのか、短くはあつたが玉鬢は書いた。

心もて日かげに向かふ葵だに朝置く露をおのれやは消つ

ほのかな字で書かれたこの歌に、同情を持つ心の言つてあるのを御覧になつて、一つの歌ではあるが宮は非常にうれしくお思ひになつた。こんなふうに恨めしがる手紙はまだほかからも多く来た。求婚者を多数に持つ女の中の模範的の女だと源氏と内大臣は玉鬢を言つていたそうである。





# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には2002（平成14）年1月15日4版発行を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年9月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

## 藤袴

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>